論　文

戦時下植民地に於ける日本語雑誌
――田中英光の位置づけ――

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

A Study of Japanese Language Literary Journals published in Japan's Colonies during the WWII
―― Tanaka Eiko's role ――

Sumiko Watanabe

はじめに

本稿執筆の二〇一六年は、敗戦による終戦から七十一年目となる。本紀要第五十二号の冒頭に、六十八回目の政府主催の全国戦没者追悼式での安倍首相の式辞にアジア諸国への侵略責任への深い反省、哀悼の意、不戦の誓いはなく、原発事故に関してもＩＯＣ総会のプレゼンテーションで原発事故による汚染水問題について「全く問題ない」、事故処理「状況はコントロールされている」と明言して呆れさせられたが、さらなる驚きは世界各地をまわって原発のみならず武器の売り込みなど「死の商人」の先頭に立ったことだった。あの日から五年半を経た現在なお福島被災民のおおくが不自由な避難生活を強いられている。住み慣れた家にも帰れず家族は離散を余儀なくされている人々の苦難の実態は想像の埒外だろう。生活の不自由より恐れられるのはチェルノブイリ原発事故の教訓である。三十年経った今でもキノコやベリー、牛乳から基準値を超える放射能が消えず、病気の多発、とりわけ子どもの甲状腺がん始め免疫低下や骨軟化症症状が数多く見られるという。福島原発事故を原因とする関連死は二〇一六年三月段階で一三六八人で前年三月の調査から一年間で一三六人増えて拡大傾向にあり、事故の収束作業に従事した作業員に被曝による白血病で労災認定者がでている。東電発表では二〇一五年の一年間で五ミリシーベルト以上の被曝者は四九五二人という。白血病に限らず健康被害はさらに増えるだろうが、当人やその家族の身に即した誠実な対応がとられているとはいえない。原発は核問題でもある。命や生活を破壊され

た犠牲者の苦悩をよそに、政権は原発推進策を進めている。「規制委」は機能を果たしているのだろうか。「原発四〇年」の原則を破って老朽原発の再稼働に突進している。政府は長く運転するほど儲かる電力企業側に立ち、国民の安全性にはそっぽを向いている。安全、安価、クリーンの神話は崩壊し、猛暑日が続いた今年は、熱中症予防にクーラー使用を連日報じ、一日中つけっぱなしの毎日だったが、それでも供給に余裕があったという。原発「不必要」が証明されたのに、電力会社側に立った施策は、多発の現況が危惧される地震国日本（甚大な被害を生じさせた地震が熊本その他で起きた）で、福島事故再来の不安を誰もが抱いているだろう。福島事故から三ヵ月後にドイツは脱原発の方針を決めた（注1）のに当事国で唯一の被爆国で、かつ地震国の日本の政府が再稼働策を変えない意図が理解できない。

本稿の意図からそれるが敢えて言っておきたい問題が近年急激に増えている。その一つに普天間飛行場の格納庫や隊舎など施設の補修工事で、高額な工事費は日米地位協定によって全額日本が負担という。「森が殺される」と沖縄県民こぞっての反対に耳をかさず建設工事を強行している米軍のヘリパット建設工事も米国の要求隷従で、日本の主体性は見られない。そこに飛び込んできたニュースは「核なき世界」をうたった〇九年のプラハ演説に行動が伴わないまま七年が過ぎた今夏、オバマ米大統領の核兵器の先制不使用宣言を盛り込んだ九月の国連安全保障理事会で核実験禁止の決議採択を呼びかける考えのあることだったが、あろうことか、安倍首相が核先制核不使用に米国の「核の傘」に頼っている立場から反対姿勢を示したというのだ。外務省も日本を取り巻く安全保障環境の厳しさから米政権に先制不使用を宣言をされたら日本を守る米国の抑止力が弱体化すると不使用に反対をとなえたが、世論への思惑からか、反対とは言っていないと米報道を否定したもののこれまで重大な問題が密約されていたことから疑念を払拭しきれない。二〇一七年度軍事費予算が過去最大の五兆一千六百八十五億円計上という厖大さに恐怖される。

中国や北朝鮮敵視のプロパガンダによって恐怖心を煽り、戦争の出来る国にしようと「解釈改憲」を加速させているが、首相はじめ政権の中枢にいる人たちは中国や朝鮮への侵略の凄まじさを学んでいない。侵略の実態を調べれば調べるほど十五年戦争といわれる戦時下の日本帝国主義の残虐ぶりに戦慄する。戦争とは人殺しだが、殺し方のエスカレートが凄まじい。一五年から一六年にかけてアウシュビッツ・ビルケナウと中国東北部（旧満洲、ここには七三一部隊を知りたくて個人旅行でも行ったので二度）に行って来たがまさに「百聞は一見に如かず」だった。「戦争やテロを減らすには武力よりも、むしろ教育の普及や格差の是正が有用だという世界認識がひろまりつつ」あって、「歴史の教訓を胸に」とは年頭の「社説」（『東京新聞』）の言葉だが、日本の現実はこの真実に逆行している。知性を磨く上で有効な文系の軽視が象徴的だが、日の丸・君が代問題、教科書問題等々に代表される「歴史の教訓」に反した政策履行の強制に教師たちは萎縮し、のしかかる苛重業務に教材研究や生徒個々指導の時間がとれず、疲労困憊しながら自虐に涙する現実に追い込まれている。日本の軍事化路線が急ピッチで進行していて「軍学共同」も防衛省によって研究費を餌として軍事研究誘導が図られてもいる。

改憲運動に拍車がかかっている。安倍首相も小池都知事も深く関わっている日本会議の動向に不安が募る。天皇の「生前退位」願望は普通の家

庭では当たり前のことだが日本会議は反対している。不戦、主権在民、男女平等（人権平等）の憲法を常に第一義におかれている天皇の意志は尊重されるべきで、男女平等＝人権平等は天皇制下でも守られなければならず、日本会議が反対する女性天皇は男女平等の憲法遵守から必然のことだろう。安倍首相の歴史認識に対する「無知」「無恥」に反して、天皇の歴史認識は感動的に深い。政権が改憲に向けて方策を練り、憲法違反を随所に犯していながら恬淡たるに引き替え、天皇は常に憲法厳守を念頭におかれている。自民党が「改憲」の根拠としていた「押しつけ史観」は、当時の首相幣原喜重郎の提案によることがマッカーサーとの交信資料で実証され、根拠は失われた。今年の全国戦没者追悼式での天皇が「さきの大戦において、かけがえのない命を失った数多くの人々とその遺族を思い、深い悲しみを新たに」し、「過去を顧み、深い反省とともに、今後、戦争の惨禍が再び繰り返されないことを切に願い、全国民と共に、戦陣に散り戦禍に倒れた人々に対し、心から追悼の意を表し」とのメッセージには真情がこめられていて心に響いたが、安倍首相の式辞では四年連続でアジアへの加害と反省には触れず、七〇年談話では村山五〇年談話のキーワード「侵略」と「植民地支配」の言葉を使って「不戦の誓い」を表明したがその一ヵ月後に多くの国民の反対を無視して海外での武力行使や他国軍支援を可能とする安保法を成立させ、続けて防衛装備庁を発足させ、今年二月には「戦力の不保持」を定めた憲法九条二項改憲の必要性に言及し、三月には安保法施行で集団的自衛権の行使可能へと、「不戦の誓い」とは裏腹の方向に突進している。

天皇は「戦争」をよく学んでいるが、安倍首相は学んでいないし、学ぼうともしていないようだ。それはつい、先頃読んだ『ＡＥＲＡ』（16・4・18、4・25、5・29、番外編4・11）の「安倍家三代　世襲の果てに」が解き明かしてくれている。小学校から大学まで受験勉強不要の成蹊学園で十六年間を過ごしたその間についての記者の取材に応じた同級生、教師たちの誰もが異口同音に存在の意識されない「凡庸」な生徒・学生だったと言っている。勉強もスポーツもまさに凡庸の一語に尽き、安倍首相自身が著書に「安保条約の条文をよんでいたわけではな」いと書いているそうだが、政治学科だったのに近現代史を本気に学んではいないとはゼミ教師の言。卒論も薄っぺらなつまらないもので処分してしまったという。卒業後の就職は「政略入社」で、最初の赴任先はニューヨーク事務所だったが、「新人が配置されるのは異例中の異例」で政略配置だろうが負担に耐えきれず一年で東京本社に戻り、社では「子犬」のような存在だったが、父が外相に就くと秘書官となって政界に入ることになったのだったという。近年の安倍首相について、成蹊大学学長、成蹊学園専務理事を務めた国際政治学を専門とする碩学の宇野重昭は記者の問いに「集団的自衛権の行使容認に踏み切るのは大変危険な選択」だ、「皮相な思想に憑かれ、国を誤った方向に向かわせないでほしい」と涙を浮かべて語ったとある。成蹊大学名誉教授の加藤節も「世襲の弊害」を述べ、憲法学の権威・芦部信喜の名さえ知らずに改憲を唱える「無知」「無恥」の安倍首相は岸の「相当に質の悪いコピー」と痛烈に批判している。これまで私は安倍首相の歴史認識に対する無知・無恥への怒りから、戦争の実態、日本の侵略の実態の検証作業を続けてきているが、恩師が「無知」「無恥」を厳しく批判していたとは知らなかった。この記事を安倍首相は読んだだろうか。師の諫言を受け止めて本気に憲法、戦争について勉強して欲しい。

『酔いどれ船』が描く植民地文学者

針生一郎は『田中英光全集』第二巻の解説で、三十六歳での自裁時、そのスキャンダラスな生と死が注目されて作品を正当に評価していないとして、敗戦までの『オリンポスの果実』中心より一九四七年以降の旺盛期を採り上げ、「『N機関区』『少女』『地下室から』など二・一ゼスト前後の革命運動や労働運動にはらまれた問題を、基底部からするどく照らし出した系列」と「『愛と青春と生活』『青春の河』『酔いどれ船』など、戦前の非合法政治活動や戦時下の植民地での抑圧と屈従にみちた青春群像を描いた系列」、さらに「『曙町』『暗黒天使と小悪魔』など、敗戦前後の巷にうごめく男女の生態を活写」した三系列に分類した上で評価しているが、この評価は肯えない。その頃既に行きずりの街娼だった山崎敬子と同棲し、泥沼のような愛欲生活にはまっていてその様態は『野狐』『離魂』以下に書きまくられていた。それらは女性と入水自殺した太宰の道程を追うかのような破滅型私小説と言えるだろう。女の下腹部を刺す事件を起こし、鯨飲にカルモチン・アドルム・ヒロポンなど薬物漬けの平行という破天荒な生活で精神病院行きとなり、太宰治の墓前での死は退院から約三ヵ月半後のことだった。戦後のみならず生涯の代表作とされた『酔いどれ船』が書かれたのは支離滅裂な乱倫生活で正常な思考状態にあったとは思われない死の前年から直前にかけてである。作歌魂が執筆時を正気にしたのだろうか。

金允植は桑原武夫編『文学理論の研究』所収の鶴見俊輔の「朝鮮人が登場する小説」で分析しているのは『酔いどれ船』だけで、大村益夫の『第二次世界大戦における朝鮮の文化状況』でも分析されているのはこの作品であると述べて、『酔いどれ船』が田中英光の代表作とされている。金が『傷痕と克服』で引いた針生の文章は次の所である。

> 長編『酔いどれ船』は、この朝鮮文人協会の時期の秘められた憂悶とデスペレートな行動を、拡大レンズにかけたようにクローズ・アップしたもので、戦争下「朝鮮文壇」の貴重な側面史ともなっている。一九四二年十一月、大東亜文学者会議が東京でひらかれ、古丁、呉瑛、沈啓允、周作人、バイコフ、草野心平、山田清三郎などが、満洲・中国代表として参加した。この一行を帰途京城に迎えて、朝鮮文人協会が交歓のつどいをひらいた事実がこの小説の背景となっている。文人協会の辛島駿、崔戴瑞、鄭人沢、緑旗聯盟の津田某（剛であろう。引用者）など、当時の「朝鮮文壇」の花形たちもそれぞれ変名で登場する。これらの作中人物の観察が、実在のモデルにくらべても的確であるどいうことについては、金達寿の証言がある。

金達寿の証言（「太平洋戦争鮮文学――金鍾漢の思い出を中心に」、『文学』１９６１・８）も少し長いが孫引きで引用しておきたい。

当時のこのいわゆる『国民文学』を推進していたのは朝鮮人側としては評論家の彼で、この人物（崔戴瑞）は、戦後、田中英光の小説『酔いどれ船』に登場してくる崔健栄のモデルであるが、それにはこう書かれている。

「――軽石のような仏頂面で崔建栄が入ってくる。このひとは昔、京城帝大始まって以来の好成績で、英文科を卒業し、かつてはマルキシズム文芸理論家として、朝鮮第一の人物だったという。その故か、石のような頑固さがあり、今でも時によると、本府の役人なぞに、火の玉のような勢いで食って掛る。役人はしまいには、いつも権力で、相手を圧倒する。そんな風に圧倒された時の、崔の口惜しそうな顔は見ているひとの心まで、暗く哀しくする程の凄まじさだった。それ故、誰もがいま、崔の胸に一物あり、率直に生きていないのを感づいている。だがそれだけに、彼の裏面の生活はやはり日本の軍官権力と結びついていたものと想像される。だから、彼は泣いても泣ききれぬような、やりきれぬ生活をしているのだろう。酔った時の彼の酒癖の悪さは有名だった。唐島博士（辛島驍）でも都田二郎（緑旗聯盟の寺瑛又は津田剛）でも見境いない。腹の底から軽蔑している態度で、泣くが如く怒号し、手もとにある皿小鉢、[ママ]手当たり次第に、叩きつけるのだった」。

私はいま、この一文を書くために田中英光のこの小説『酔いどれ船』を読みかえしたものであるが、崔戴瑞をモデルとしたこのくだりを読んで、一つの感想を持たないわけにはゆかない。いうならば、田中英光の方がはるかに彼を深いところでつかんでいたということである。

金允植は崔戴瑞がマルキシズム批評家だったというのは「事実無根」だが人物像は符合していると述べた上で、当時を生きたいわゆる「半島文人」たちの恥辱の感情は黒塗り（注2）された現実の視点から、内鮮一体と国民文学論意識徹底に日本人として直接に干与した田中英光の作品として「碧空見えぬ」と『酔いどれ船』を挙げ、前者は小説家森徹（李石薫＝牧洋と推定）をモデルとして「半島文人」の内鮮一体の徹底化の加害者の立場からほとんど事実そのままに描かれているといい、加害者の感情は『酔いどれ船』に集大成されているとも言う。『酔いどれ船』を読むには『天馬』を先ず読まねばならぬとも。『天馬』に登場する内地作家田中は田中英光そのままでは無いが、戦争下、「植民地朝鮮に君臨して、作家としてまた加害者として、退廃と享楽に身をまかせ、作品行為を行った田中英光の内面風景」を金史良がよく把握していたことが認められ、内地作家の心理を鋭く観察しながら東京文壇で地歩を築いていた金史良に英光は対決意識とコンプレックスを抱いていただろうと金はみる。『天馬』は田中英光たち『緑旗』派に対する金史良の鋭い攻撃になっているとも。『酔いどれ船』は確かに『天馬』を意識して書かれている。『天馬』の登場人物、玄龍・文素玉・大村・田中・角井らは『酔いどれ船』では玄龍を除き、女性詩人蘆天心＝文素玉、青人草聯盟（緑旗聯盟）の都田二郎＝大村、大学教授辛島博士＝角井は明確に符合する。『酔いどれ船』では他に作者自身の享吉、牧徹（牧洋）、安斗性（専門学校英語教授、評論家）、新

聞社学芸部長白哲（白鉄）、則竹（則武三雄）、『朝鮮文学』（『国民文学』）主幹の崔建栄（崔戴瑞）らが登場し、享吉が釜山まで東京で開催された大東亜文学者会議終了後、帰途朝鮮を通過して帰国の中国・満洲・蒙古代表作家を迎えに行き、京城で歓迎会を享吉が準備役になって開く話しだが、そこに白系ロシア人ハリコフを巡るスパイ事件を絡ませて、スパイ小説・冒険小説仕立てを挿入し、さらに薄汚い性欲小説となっているが込み入った展開になっていて梗概は紹介しにくい。結末は廬天心が辛島博士の腕の中で都田二郎に撃たれて死に、享吉は憲兵隊に流言蜚語容疑で逮捕され、日本敗戦の日まで竜山の陸軍刑務所に投獄されることになるが、連行されながら、この逮捕は「（恐らく昨夜、都田が狂気直前にした手配によるものだろう。墓地内の怪死体に続き、明月館、ホテルでの相次ぐ惨劇の秘密のキーを握るものとして、俺は責めぬかれるに違いない）それでも廬天心の面影のために、享吉は死ぬまで黙っていようと心に誓った。」のだったとあり、「ここ（刑務所――引用者）では、享吉が最期までアル中による妄想症として振舞い、廬天心への清らかな愛情の前に、誰も友人を売らなかったことだけつけ加えておきたい。これは坂本享吉と廬天心の奇妙な恋の物語なのである。」が結語になっている。

以上の紹介ではストーリーは茫漠としていて作品の全容の把握は無理だろう。大量の薬物摂取と相変わらずの鯨飲で幻視や幻聴に悩み、暴れたりもしながら書き続け、この作の完成は死の二ヵ月前だった。発表当時は注目されなかったが金達寿の戦争下の「朝鮮文壇」を知る上での不可欠作論から評価が高まり、川村湊による長文の田中英光論「〈酔いどれ船〉の青春――もうひとつの戦中・戦後」（『群像』１９６６・８）によって作品の意義が認識されるようになった。

川村湊はかなり長々と梗概を述べてはいるが、長いとはいっても二段組四ページ弱の説明では同じく二段組一四九頁（『全集』第二巻）に及ぶ作品を説明しきれはしない。

一九四二年十一月四日、日本文学報国会が東京で主催した「第一回大東亜文学者大会」に出席した朝鮮代表が帰国したのと、中国、満洲、蒙古代表がその帰途京城で彼等のために歓迎会が開かれたのは事実で、林鐘国の『親日文学論』（大村益夫訳）によると、この大会に朝鮮代表として出席したのは香山光郎（李光洙）、芳村香道（朴英熙）、兪鎭午、辛島驍、寺田瑛の五名だったという。東京での会修了の九日に帰途につき、十三日釜山着、白鉄、金村龍済（金龍済）、鄭人沢、田中英光らに出迎えられて京城に向かい、京城では京城帝大講堂での大東亜文学者会の報告の講演会が開催され、その後、市内の有名料亭明月館で朝鮮文人協会と官民有志の共催による招待宴が設けられ、翌日は市内見物、総督府訪問後、満州鉄道で京城駅から帰国したとある。見送りには大勢がつめかけ、招待者に女性詩人廬天命（『酔いどれ船』での廬天心）の花束贈呈でセレモニーは終わったらしい。

作品『酔いどれ船』にはこのセレモニーはほぼ事実通りだが、特に射殺事件や享吉の投獄を含むその他は虚構である。川村湊はこの作品について、「大まかに結論的にいえば、「大東亜文学者歓迎会という事実を基にして田中英光が紡ぎ出した架空の〝妄想〟的なストーリーであって、そ

こにはヒロイズム、被害妄想、少年じみた純愛思慕、センチメンタリズム、自己贖罪感、自己正当化といったあらゆる要素をごった煮にされ、酩酊のはての悪夢、酔余の幻想として書き綴られているのである」とまとめているがその通りだろうが登場人物には田中英光の主観的デフォルメで色づけされていて、草乃心兵＝草野心平は無難としても則竹＝朝鮮警察警務局嘱託の則武三雄の戦争使嗾者面には何の疑問も感じていないらしい。学生時代からの友人の親しさから、酔ったまぎれに京城で一番人通りの多い鮮銀前広場中央の水涸れになった噴水台上で則竹に脱糞させる場面が作品の幕開けになっている。この開巻直後の不快感は最期までつきまとう。

悪役扱いされている日本人として作中では京城帝大教授唐島博士（京城帝大文学部主任教授、朝鮮文人協会幹事、国民総力朝鮮聯盟文化部委員、第一回大東亜文学者大会朝鮮代表、朝鮮文人報国会理事長の辛島驍）、青人草聯盟代表都田二郎（総督府がバックアップの緑旗聯盟の教務局主事、緑旗聯盟主幹、国民総力朝鮮聯盟宣伝部長・津田剛）、京城日報の田村学芸部長（毎日申報学芸部長の寺田瑛か）の三人が挙げられるが、享吉が廬天心からどんな卑劣な事でもする唐島博士に注意するようにと囁かれる場面がある。辛島驍・津田剛（京城帝大予科教授で「緑旗聯盟」創設は実兄の津田栄）の総督府の皇民化運動の御用ジャーナリストとしてのプロパガンダ発言の凄まじさは既に書いてきた通りである。辛島驍、津田剛・栄（『緑旗』には妹二人も登場）とはどんな人物なのか人物事典等には見当たらない。朝鮮文壇を牛耳っていた悪質なイデオローグなのだが、戦後の田中英光はじめ著名日本人文学者たちに日本帝国主義の走狗となってファナティックに「内鮮一体」「皇民化」「八紘一宇」の浸透に本気で取り組んだことに対して人の心に響くような自己批判はみられない。戦後二〇年も経ってからの辛島驍に「戦没朝鮮人学徒兵は結城尚弼君だけではない。あの日京城をたっていった学生のうちにもとうとう帰れなかった者があったはずだ、京城からばかりではない。日本内地から出陣した学生も加えれば朝鮮人学徒兵の数はおそらく数万に及んだであろう。そのうちどれだけが尊い生命を散らしたのであろうか。／今年も八月十五日に全国戦没者の追悼式が行われた。それも、靖国神社の境内でであった。戦没朝鮮人学徒兵には誠に申しわけなく、断腸の思いがする。……／我々日本人のために、自ら血を流して死んでいった彼等に対して、戦後我々は何をしたであろうか。かえりみることも無く打ち捨てて良いものであろうか」（「朝鮮学徒兵の最期」『文芸春秋』、１９６４・10）という文章のあることを川村文から教えられた。戦時下の夥しい彼の発言を読んできた私には「今更、何を」の感想しか無い。だが、戦後二〇年経ってからとはいえ、靖国の英霊になることを栄誉とたき付け、歓呼の声で死地に送り出した学生への慚愧の念に目覚めたのは諒とすべきだろう。『酔いどれ船』にはこの種の懺悔も自己批判も反省もみられない。魔窟に通う薄汚い性欲と酒浸りの醜態描写が多くて投げ出したくなる。

『天馬』と『酔いどれ船』

すでに触れてきたが『酔いどれ船』は『天馬』を意識して書かれていることは明白だろう。「天馬」は津田左右吉の『古事記及日本書紀の研究』までが発禁になる出版法違反による起訴が相次ぎ、大政翼賛会発会、紀元二〇〇〇年記念式典、文化統制強化に向けての内閣情報局発足という太平洋戦争勃発前年の思想の自由はとっくに死滅し、言論の自由圧殺が猛威を振るった時節に発表された作品である。関東大震災時、流言蜚語によって六千人以上の「朝鮮人」が官民によって虐殺された負の歴史は現在も生き続けていて、在日コリアンたちを排斥するヘイトスピーチをネットと路上で高唱し続けている「在日特権を許さない市民の会」（「在特会」）の前会長が都知事選に立候補して一一四一七一票を獲得し、立候補者二十一人中五位だった現実に慄然とするが、圧勝した小池百合子は在特会が協賛する講演会講師を務めるなどネット右翼層との親和性が高い（『東京新聞』16・8・4）という。小池は日本会議とも親密な関係をもつという。今後の都政が危ぶまれる。

日本の韓国に対して行ってきた加害の実態を知れば「在特会」の犯罪性が露呈されるのだが、為政者をはじめとして知ろうとしない人が多すぎる。そこで想像不可能な厳しい時代にあって「天馬」を書いた金史良について、簡単に紹介しておきたい。「天馬」について金允植は「この作品は朝鮮文学が今まさに消滅せんとするその直前の時期を背景にして」「植民地文学者たちの苦悶と卑屈さとを、性格破綻者である小説家玄龍を通じてみせてくれた」もので、「民族を母胎とする近代文学が、異民族の強制によって、いかなる文化的破綻がもたらされたかという問題を、もっとも鋭く、そしてまさに問題とされている日本語によって書いた点」に重要性があると述べている。登場人物は虚構化されているが玄龍は大江龍之介と創氏改名した金文輯、田中は田中英光、大村は総督府御用団体として猛威を振るった『緑旗』及び緑旗聯盟の責任者津田剛、角井は「えせ学者」辛島驍であろう。玄龍は「親日文学の葛藤の中で性格破綻にいたった当時の朝鮮文学者を代表する人物であり、大村ほか田中、そして角井は、加害者の顔を代表する人物だとみることができる」とあって、作品の意図について作者自身の言葉を引いている。

> 拙作『天馬』の中において、私は否定的な面にのみ執拗に食ひ下がった趣はあるが、それでも已むに已まれぬ気持ちで、かくも憎むべき主人公をよくよく横行させる社会を呪ひ、且つさういふ人物をみて朝鮮人全般を兎や角云って貰っては困るといふことをも暗示したかった。
> （『朝鮮文化通信』1940・9）

戯画化されているが主人公玄龍の中には社会的批判、民族的悲哀が重く流れている。「天馬」に登場する「内地作家」田中が田中英光そのもので

は無いが「戦争末期、植民地朝鮮に君臨して、作家としてまた加害者として、退廃と享楽に身をまかせ、作品行為を行なった田中英光の内面風景を、金史良がよく把握していた」ことが認められると金允植は書いている。『酔いどれ船』は金允植が言うように『天馬』に描かれた「田中」および「緑旗」派への攻撃に応えるために書かれたのだろう」という川村湊の推測を是とすれば、戦時下に書かれた作品に対して大転換を遂げた戦後に而も八年も九年も経ってから結果的には絶筆的作品とも言える長編を書かなければならなかった意図はどこにあったのだろうか。『天馬』における田中攻撃は、田中英光の内部でくすぶり続けていたということなのだろう。『天馬』における主要人物は『酔いどれ船』での玄龍を除いた人物と符号する。盧天心は文素玉、青人草聯盟の都田二郎は大村、唐島博士は角井に対応する。『酔いどれ船』にはなお作者自身を投影させた享吉のほか牧徹（牧洋）、安斗性（評論家）、白哲（白鉄）、則竹（則武）、『朝鮮文学』（『国民文学』）主幹の崔健栄（崔戴瑞）らが登場し、大東亜作家大会に参加して帰ってきた文学者達を迎えて京城で歓迎会を開いたのは事実だがそれ以外はすべてといっていいほど虚構であるが、留意しなければならないのは戦後の作品である事である。そこで参考として金史良の略歴をごく簡単に見ておきたい。

本名金時昌の金史良は一九一四年に平壌屈指の富豪家に生まれ、兄は「朝鮮人」として最初の総督府専売局長になった人。三三年、佐賀高校（現佐賀大学）に入学し東京帝大独文科に進学、学生時代に村山知義の知遇を得、『文芸首都』発表（１９３９・10）の「光の中に」が芥川賞候補になって張赫宙と共に日本文壇に地位を得たが、厳しい弾圧によるプロレタリア文学の後退は「内鮮一体」を唱える統治権力隷従強要の厳しい植民地政策によって四一年一二月検挙され、翌一月釈放後帰国。しばらくの沈黙の後、「太白山脈」を『国民文学』に連載。この作は皇民化徹底時局下にあってぎりぎりの抵抗作だったといえるだろう。これが日本語で書いた最期の作品となった。以後は時局協力のいわば「宣伝小説」を朝鮮語で、総督府機関紙の御用新聞「毎日申報」に連載したが、朝鮮語で国策便乗の親日文章を書いた事への挫折感から筆を折ってドイツ語教師になるが、四五年二月、国民総力朝鮮聯盟兵士後援部から「在支朝鮮出身学徒兵慰問団」員として北京に派遣されたのをチャンスとして、五月、途中で工作員の手引きをうけながら日本軍の封鎖線を突破して華北朝鮮独立同盟の連絡地に辿り着き、目指した同盟の本拠地に着いたのは約二ヵ月後だったらしい。脱出行から抗日陣営に着くまでの経験は『駑馬万里』のほか、「胡蝶」「ドボンイとべべンイ」など徹底的抗戦をよびかける戯曲を書いていると言うがどんな作品だろうか。日本敗戦後、平壌に戻って解放後の新しい社会状況下で作家活動を始めたが、朝鮮戦争で北の軍隊に従軍して従軍中に死亡したらしいが、死の詳細は不明のようだ。時代の犠牲者ともいえる三六年の生涯はあまりにも無残だ。惜しまれる作家である。

以上の素描からも金史良の短い生涯は日本帝国主義に翻弄された犠牲者だったと言わねばならぬだろう。母国語として韓国語で育った者が富裕家庭の子として生まれた幸運から得た留学によって獲得した外国語の日本語が彼の人生を不幸に逆転させて、韓国語を放棄して筆を折るか、日本語で延命を図るかの二者択一を迫る、韓国語＝民族語の抹殺政策の本格化（一九四一年）の前年作である『天馬』は研ぎ澄まされた目で読まねばならぬ。『天馬』発表に先駆けて李光洙は、

わたしはいまになってこうした信念をもつにいたった。すなわち、朝鮮人はまったく朝鮮人であることを忘れねばならない、血と肉と骨がすっかり日本人になってしまわねばならないと。（「心的新体制と朝鮮文化の進路」40・4『毎日新報』）

今では、祖国日本より離れようなんて夢想してゐるものは一人もないだらう。ただ、われわれは本当に日本人になれるのかな、本当にわれわれを尋常一様の日本人にしてくれる気かなと、不安がってゐるだけである。（『内鮮一体随想録』中央協和会刊、41．創氏名・香山光郎）

と発言していて、「皇道精神の昂揚」に尽力を惜しまなかった『国民文学』主宰者の崔戴瑞の先駆者だったのだ。李光洙について贅言を差し挟みたい。本学への韓国人留学生の学位論文指導に当たった時、彼女らの口から屡々漏れ出た李光洙は、儒教の国韓国に於ける女性解放を唱えた韓国近代文学史上先駆的文学者の認識にたち、反日独立運動の闘士として活躍した尊敬すべき文学者という位置づけだった。当時、韓国文学史、韓国文学者に無識だった私は彼女らの評価を知識として受容し、納得していた。今となっては慚愧に堪えないがのみならず、韓国の戦後世代の人たちにとって韓国近代文学の始祖的認識が通用しているのは、日本の場合にも通底するが、戦争犯罪糾明の不徹底性さにより、そのことが危惧を深める現状の基底であろう。

まとめ

『酔いどれ船』は戦後の民主主義昂揚期に書かれた作品である。戦時下の厳しい時期に書かれた『天馬』が脳裡にあっての作品と考えられる。『国民文学』『緑旗』その他での活躍ぶりを見てきた田中英光について『傷痕と克服』の著者金允植は、「太宰治の推薦で文壇に登場、一九四〇年『オリンポスの果実』で名声を博し、ソウルにいたもう一人の日本人詩人則武三雄とともに、日帝思想善導に努力した悪質な文学者であった。われわれがあえて『悪質』という表現をためらわないのは、それが文学と思想に関連しているからである。とくに田中は、金史良の『天馬』という作品のなかにも、堂々たる加害者――親日韓国文学者たちの救世主として登場している。まったく田中は、小説においてとはちがって、実際はもっとも忠実な皇道主義者であった」と述べている。この本の訳者でもある研究者の大村益夫も、

田中英光は朝鮮文学界の帝国主義的再編成に力を貸した犯罪者である。朝鮮人と接触し、朝鮮人を「深いところでつかんでいた」としても許すわけにはいかない。ただ、かれは権力機構のなかに身をおいていることに罪の意識をもっていた。軍、官、財界をふとらせるために仕事

をしている自分がおぞましくて酒を飲み、酒を飲んではいっそう自己嫌悪におちいっていった。そこに一部の朝鮮人文学者たちとの間に、ある種の共犯者意識にも似たものがはたらいたのであろう。かれが侵略側の民族の一員である限り同列には並べられないが。（「第二次世界大戦下における朝鮮の文化状況」、『社会科学討究』四三号、１９７０）

と書いているが、川村湊も「朝鮮時代の田中英光は〈内鮮一体〉の政策に加担し、積極的にいわゆる『国民文学』のイデオローグとして活動したのであり、それは大村益夫が『田中英光は朝鮮文学界の帝国主義的再編成に力を貸した犯罪者である』と批判するように、植民地政策の協力者として弾劾されるべき」であって、「植民地朝鮮でのいわゆる国民文学運動においてはたした役割は『明白』」だ」と述べ、重ねて「彼は『諺文（オンモン）』の読めない内地人作家として〝国語（日本語）一本槍〟であることをむしろ優位の条件として、朝鮮人文学者たちに、〝国語〟で作品を書くことを奨励し、暗に強要した」と批判し、「朝鮮を去る日に」の中で「諺文文学を揚棄して、一日も早く国語文学一本建となすべきべきだ」（既発表拙論で引用、批判）と書いているが、「それが彼にとって何のためらいもない」「真理だった」からで、この感覚は『酔いどれ船』に「そのまま保存されてい」て、『酔いどれ船』は「一種の転向小説」とあるがまさにその通りである。

金允植は朝鮮人作家の「言語朝鮮」から「言語日本」への選択と移行過程問題について「内鮮一体に協力した作家」「内鮮一体には協力しなかったが主に日本語で作品活動した作家」「韓国語を最期まで守ろうとした作家」に分けてその代表作家を林和、金史良、李泰俊としていて、韓国における解放直後（一八四五年十二月）に行われた座談会（発表は、「文学者の自己批判」、『わが（ウリ）文学』一九四六年創刊号）での発言を載せている。金史良の発言の要点は、当時は「死なずに生きていることが最大の反抗のようにみえるほど息をするのさえ困難」だったので、「国内を脱出して延安に行ったのは、厳密な意味では一つの逃避といえる」が、国内の革命陣営と連絡がとれず、海外の革命勢力の闘いの事実を「国内の同胞に知らせたい作家的野心」が「延安行の動機」で、日本語で書いたのはその方が少しでも自由に書け、弾圧が減るだろう、その上、「朝鮮の真の姿、われわれの生活感情等を『リアル』に」訴えられるだろうとの「高い気概と情熱」によったのだが、これは「誤謬」だったと「率直」に「告白」していて、解放直後のこの発言は重い。

日本及び日本人が韓国＝韓国人（朝鮮人）の生き方＝心に与えた傷痕は限りなく深い。金史良の自己批判は素直に受け止められる。一方、韓国に対して、韓国の人民に対してその尊厳を奪い、語り尽くせぬ犯罪を犯した日本・日本人として〈内鮮一体〉〈皇民化〉推進に大活躍した田中英光には、その犯罪行為に反省、懺悔の心は戦後作『酔いどれ船』においても見られない。田中英光の犯罪性は六九四頁にわたる『田中英光事典』（三弥井書店、二〇一四・四）でも徹底批判されず黒塗りされた感がある。

古くは大逆事件、戦中下の横浜事件、戦後の松川事件に象徴される恐怖が咄嗟に想起される「共謀罪」の国会提出が準備されているという昨今

の政情には慄然とさせられるが、『日本国憲法』で誓った「恒久の平和」を維持し続ける為に負の歴史をしっかりと学ばなければならないだろう。（25・9記）

注1　台湾の立法院は二〇二五年までに原発を完全に廃止する電気事業法の改正案を可決した。（17・1・12『朝日新聞』『東京新聞』）

注2　四八年八月、李承晩を大統領として樹立された大韓民国は第一回国会で「反民族行為処罰法」を通過、反民特別調査機関法を公布。四九年一月から反民特委によって李光洙、崔南善他が西大門刑務所に収監された。だが李光洙の地元民の釈放要求で一ヵ月足らずで出監、国内政治の左右対立の激化により、反民特委委員は総辞職し、〈親日派〉は法的処罰から免罪され民族反逆者の親日派についての論議はタブー視されるようになり、文学史の暗黒期は人々の記憶から急速に忘れ去られていった。日本にも言える現象であり、戦争協力・使嗾者追求の不徹底が、今日の「戦争のできる国」へ施策を加速させている現状をうみだしていると言えよう。

追　オバマ大統領が検討していた核兵器の先制不使用の宣言は、「核の傘」に依存する日本など同盟国に不安が広がったことで、不使用の宣言は見送ることになり、今後は核実験禁止を呼びかける国連安全保障理事会の決議や、核兵器を刷新する近代化予算削減などを検討するという。（一六年九月七日『東京新聞』夕刊）